11．1．4
村川淳一

日本陸軍航空史（その 28）
～航空特攻（3）～

1 はじめに

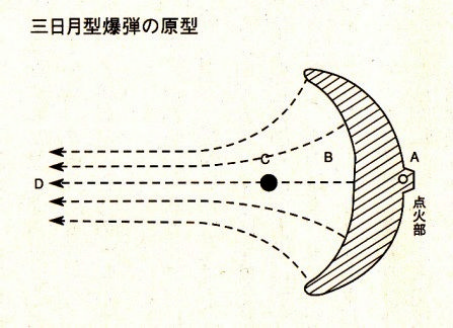
昨年 11 月 8 日（月）、その約 1ヵ月前にオープンした**筑前町立大刀洗平和祈念館**を訪れました。非常にデラックスな記念館でした。右下写真は、97 戦の写真入りの入館券です。本機は、**朝倉郡三輪町**にあった旧大刀洗平和記念館に展示されていたもので、平成 8 年に博多湾から引き揚げられた**渡辺利廣少尉機**です。満洲から知覧への飛行中に不時着した機体で、この際、渡辺少尉は助かりましたが、昭和 20 年 4 月 22 日、同少尉は第 105 振武隊員として知覧から特攻出撃し沖縄洋上で散華しました。

大刀洗平和祈念館入館券の 97 式戦闘機

参考文献 7 によりますと、沖縄作戦における陸軍特攻機の数は 932 機で、うち、97 戦と 97 戦の機体に低馬力の発動機を搭載した 2 式高等練習機による特攻は 213 機であり、約 23%を占めます。このような旧式の機体で出撃せざるを得なかった特攻隊員の悲壮な思いが偲ばれます。

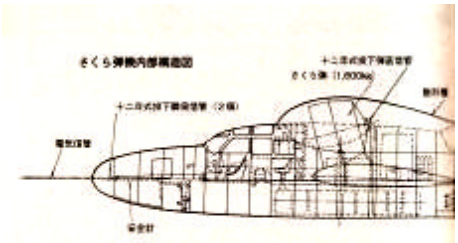
受付カウンターでは多数の陸軍航空関係図書が販売されていましたが、その中に買いたいと思っていた**『重爆特攻「さくら弾」機』**（林えいだい著）[3]がありました。さくら弾を搭載したのは、**4 式重爆『飛龍』**です。

さくら弾は、ヒトラー総統から潜水艦でもたらされた、説明もないポンチ絵を基に、第三陸軍航空技術研究所の正木 博少将のグループで研究開発されたもので、ノイマン効果を利用した全く新しい爆弾でした。ポンチ絵は直径約 2m でしたが、開発品は、直径 1.6m、重量 2.9t で、実験では 8 枚のコンクリート板すべてに穴があき、隊員の間では、「1km 四方が木端微塵になる」などと噂され、密かに「起死回生の兵器だ」と期待されました[3]。



ノイマン効果を応用したさくら弾の原理[3]

『重爆特攻「さくら弾」機』表紙の同機[3]


さくら弾機の内部構造図[3]（操縦席後ろのｺﾝｸﾘｰﾄ・ﾐｷｻｰのような形をしたのが「さくら弾」で、ｴﾝｼﾞ色をしていました。1,600kg とあるのは、1,600mm の誤りと思われます）

しかし、原理上、厚い鉄板に穴をあけることはできますが、火炎が搭載弾薬を直撃しない限り、周囲に破壊力を及ぼすことは無理であったと思います。

また、昭和 20 年 6 月、呉海軍工廠で、製造中止となった**空母『阿蘇』**を使用して**飛行機用通常爆弾、魚雷頭部**及び**さくら弾**による実験が行われ、**飛行機用通常爆弾が最も効果的である**という結論が出ました[7]。

さくら弾が機体に収まりきらないため、上部にベニヤ板製の整流カバーが付けられましたが、重量の大幅な増加と空気抵抗の増加が相まって操縦は非常に困難となりました。

配備されたのは、**西筑波**で編成された**飛行第 62 戦隊**で、**『ト号機』**(飛龍に 800kg 爆弾 2 個搭載の特攻機)とともに、**大刀洗北飛行場**(コンクリート製滑走路×2 本、昭和 20 年 2 月完成)に進出し、特攻準備にあたりました。主滑走路は 50m×1,800m で重爆用、補助滑走路は 30m×1,600m で重戦用です。重爆にとって非舗装の**大刀洗飛行場**は着陸が困難であり、北飛行場を利用せざるを得ませんでした。

現在道路となっている北飛行場滑走路(筆者撮影)

しかし、**ト号機**と**さくら弾機**は、操縦士の練度不足、訓練時間不足、材質の低下(木材の多用など)、工作精度の低下(当時の航空機はすべて、学生・生徒や女子挺身隊員などの作業で工作精度の低下があったと考えられます)による機体強度不足及び過大な重量(飛龍の正規の爆弾搭載量は 800kg)によると思われる墜落事故が続発しました。また、航空を急激に拡充したために参謀本部や第 6 航空軍などには航空兵科の幕僚が不足したこともあってか、戦闘機の掩護なしの特攻出撃が常態化するなど、航空戦力の特性を無視した精神主義的な命令が多く出され、犠牲が積み重なりました。

ト号機は、敵艦を発見できずに何度も帰還していますが、**さくら弾機**は、片道燃料しか積めませんから、出撃がそのまま死につながりました。また、両機種とも武装はすべて取り外され、最小限の 4 人(機長たる操縦士、航法士、機関士及び通信士)が乗り組んで戦闘機の援護もないまま低速で飛んでいるのですから、レーダー装備やレーダー誘導の敵戦闘機の餌食になりに行くようなものでした。

さくら弾機は昭和 20 年 3 月に完成しましが、**各務原航空廠**で受領した初号機は、熊谷南の**松山秘密飛行場**に着陸する際に脚を折る事故を起こします。また、4 月 15 日には、各務原から大刀洗に空輸する途中のさくら弾機が大刀洗飛行場に近い**大福村**の畑に不時着しました。次いで 4 月 17 日には、沖縄特攻に出たさくら弾機 2 機が、**喜界島東方洋上**で行方不明となりました[3)]。

さらには 4 月 24 日、**各務原航空廠**で、62 戦隊の受領試験飛行を終えたさくら弾機が着陸態勢に入ったとたんに左の発動機の停止で墜落し、3 人が殉職しました。しかし、さくら弾機が特攻機の切り札と考えていた陸軍中枢は、欠陥機と見られる同機による攻撃を中止しませんでした。

各特攻機は**大刀洗**から他の特攻基地にいったん移動してから出撃するのですが、一度だけ直接特攻を行ったことがあります。特攻時期は昭和 20 年 5 月 25 日ですが、その前に重大事件が発生しました。出撃に備えて、**北飛行場**には、さくら弾機 3 機とト号機 2 機が駐機されており、5 月 22 日、特攻隊員たちは壮行会のために 8 キロ離れた**二日市温泉**にトラックで移動し、壮行会に参加したのち同温泉の旅館に泊まり、翌朝飛行場に来て、掩体内のさくら弾機 1 機が焼けただれているのを発見しました。

憲兵は当日、その飛行機に搭乗予定の通信士・**山本辰雄伍長**を逮捕しました。そして 8 月 8 日の軍法会議で死刑が宣告され、8 月 9 日、福岡市油山(あぶらやま)の雑木林で銃殺刑が執行されました[3)]。山本伍長は北朝鮮の出身でしたが、逮捕されるまでほとんどの隊員は、彼の出身地を知りませんでした。しかし、**山本伍長は同僚とともに二日市温泉に泊まっており**、冤罪の可能性が大です。北飛行場近くには、飛行場建設に従事した朝鮮出身者の飯場があり、飛行場建設後も数百人が暮らし、爆撃された滑走路の穴埋めや、飛行場に投下された時限信管付き爆弾の処理など、危険かつ過酷な労働に従事させられていましたので、そのうちの誰かが犯人であったことも考えられるようです[3)]。

5 月 25 日には、**さくら弾機 2 機**と**ト号機 2 機**が出撃し、**沖縄本島と粟國島の間**で、さくら弾機 2 機が突入の信号を送っていますが、米海軍からの被害は伝えられていません。米海軍は輸送船の被害をほとんど記録に計上しませんので、特攻の効果がなかったとは断定できません。ト号機 2 機は航法誤差と降雨のために帰還しています。海軍の**桜花**といい、陸軍の**さくら弾機**といい、あまりにも人間性を無視した悲惨な兵器でした。

2 陸軍の航空特技者養成教育体制の変更[3)7)8)]

従来、**将校**は**士官候補生**と**少尉候補者**、**下士官**は**少年飛行兵**によって補充されていましたが、それでは間に合わないために、昭和 18 年 7 月 3 日、**『特別操縦見習士官』**(特操:とくそう)の採用が決定されました。採用条件は**「大学学部又は予科、高等学校高等科、専門学校、高等師範学校本科又は陸軍大臣が同等と認める者」**であり、採用されると曹長になり、1 年半で少尉になるというものでした[7)]。

特別操縦見習士官の養成は過酷で、**地上準備教育 2 ヵ月**、**操縦教育 1 年**で戦場に赴きました。将校としての基礎的軍事識能や航空専門知識は、1 年間の操縦教育の間に身に付けるほかありませんでした。**1 期生**は昭和 18 年 10 月に入隊、1 年後に少尉に任官しました。最後に特攻突入したのは **3 期生**で、まだ見習士官でした[7)]。最後の **4 期生**には故**竹下登**元総理がおられ、合計約 8 千名でした。

航空士官学校 57 期生は、修業期間 2 年が 4 ヵ月短縮され、昭和 19 年 3 月 20 日に卒業しました。それまでは地上兵科のほうが先に卒業していたのですが、57 期以降は逆になりました。卒業者は 751 名(うち他科からの転科者は約 120 名)で、この人数は概ね全兵科の半数でした。**58 期生**は昭和 20 年 6 月卒業で、航空・地上はほぼ半数ですが、卒業前に終戦を迎えた **59 期生**、**60 期生**は、航空のほうが多かったようです。士官学校卒業者中、特攻戦死者の最も多かったのが **57 期生**でした。**58 期生**は飛行教育隊などで教育中に終戦を迎えました[7)]。

少尉候補者出身の特攻参加者は、昭和19年卒業の**24期生**が最後でした。その他の操縦幹部養成手段として、民間の操縦者を採用する**操縦候補生**がありました[7)]。

少年飛行兵(少飛:しょうひ)の入校資格は、昭和 9 年開校以降、操縦生徒が満 17 歳以上、技術生徒が満 15 歳以上満 18 歳未満で、双方とも高等小学校卒以上でしたが、昭和 12 年 4 月からは、双方とも満 14 歳以上満 17 歳未満、小学校(のちに国民学校と改称)卒以上になりました[7)]。

彼らは、**東京**、**大津**、**大分**の**各少年飛行兵学校**で**基礎教育を 1 年間**、**熊谷陸軍飛行学校など**で**地上準備教育を 1 年間**、**基本操縦を 1 年間**、その後**各飛行教育聯隊**で分科ごとの**戦技教育を 4 ヵ月**、さらに**隊付教育を 2 ヵ月**行って、合計 **3 年 6 ヵ月**で**伍長**に任官していました[7)]。

しかし、これが、**基本操縦 4 ヵ月**、**基本戦技教育 4 ヵ月**、**練成教育 4 ヵ月等**と、**2 年未満**で卒業することになり、戦場に赴いた最も若い卒業者は 17 歳前後で、このように幼い少年が特攻隊員として散花していきました[7)]。

右は、昭和 20 年 5 月 27 日、**第 72 振武隊**で**万世飛行場**から出撃し、沖縄南方海上で敵艦船に突入散花した、前列左から**早川勉**、**荒木幸雄**、**千田孝正伍長**、後列左から**高橋要**、**高橋峯好伍長**です[8)]。彼らは**最後に特攻突入した第 15 期生**(昭和 17 年 10 月入隊)です。

仔犬を抱いた特攻隊員(毎日新聞社提供)[8)]

少年飛行兵では下士官養成に期間がかかり過ぎると、昭和 18 年 12 月に、『特別幹部候補生』(特幹:とっかん)の採用が決定されました。入校資格は、満 15 歳以上 20 歳未満、「中学 3 年修了又はそれに準ずる学力のある者」でした。採用されれば 1 等兵となり、初年兵の苦しみを受けずに済みました。飛行のほか、船舶、通信、工科、戦車、鉄道もありました[3)]。

昭和 19 年 4 月に、操縦の特別幹部候補生 1 期生約 3 千名が大刀洗陸軍飛行学校甘木生徒隊に入校しました[3)]。朝倉市にある特幹の碑には「7 月に生徒課程を修了し、各地の操縦教育隊に配属された」とあります。平成 21 年 4 月に、西依武信氏(故人)に伺ったところでは、入校後 10 ヵ月で伍長に任官したそうです。

特幹の碑(福岡県朝倉市甘木公園内:筆者撮影)

これで年間 2 万名の操縦者を養成する施策は軌道に乗り、昭和 19 年秋には第一陣が戦地に配属されたのですが、予想よりも 1 年早く比島に敵の攻撃が及んだために練成期間を取ることができず、敵操縦士との技量差を補うために、特攻という手段を選択せざるを得なくなったことも事実です[7)]。

3 比島作戦における航空特攻

(1) 陸・海軍の特攻に関する施策の相違[7)]

海軍はすでに空母を失っていたために、現地航空部隊を中心として全航空部隊が特攻化しようとしていましたが、陸軍はそれほどではなく、中央で特攻隊を編成して現地に送り出していました。

また、海軍の特攻隊は少数の攻撃機と直掩機を一組として運用し、直掩機の未帰還も特攻戦没として全軍に布告され、艦爆、艦攻などの多座機には、座席数に応ずる人員を乗り組ませましたので、特攻戦死者数も多くなっています。一般飛行部隊をそのまま特攻隊として攻撃させたのです。

それに対して陸軍は、特攻の特別中隊を編成し、直掩機はその都度戦闘機部隊から部署されていました。そして、直掩機の未帰還は特攻扱いをされず、2 階級特進もありませんでした。これは直掩部隊隊員の士気の低下を来たす、まずい施策であったと思います。

(2) 神風特別攻撃隊のその後の攻撃[1)2)5)]

ア 大和隊の攻撃[5)]

前号では第 1 次攻撃隊について触れましたが、第 2 次攻撃隊は昭和 19 年 10 月 26 日 1015 に爆戦 2 機(植村真久少尉、五十嵐春雄 2 飛曹)、直掩 1 機(日村助一 2 飛曹)が発進しました。しかし、F-6F×60 機によって全機撃墜されてしまいました。

第 3 次攻撃隊は 10 月 26 日 1030 に爆戦 3 機(勝又富作、移川普一、塩田 寛 1 飛曹)、直掩 2 機(高橋保男 1 飛曹、勝浦茂夫飛長)が発進し、スリガオ東方約 150km の護衛空母 4 隻などを発見、敵戦闘機の上空哨戒防御網を突破し、勝又機と移川機が護衛空母『スワニー』に体当たりして火災・大破を引き起こしました。乗員 1,100 名中、戦死者 107 名、負傷者は艦長を含め 170 名でした。

また、塩田機は空母『ペトロフ・ベイ』の艦橋付近に体当たりして火災を引き起こしたようです(参考文献 1 の米海軍記録にはありません)。この際高橋 1 飛曹は生還、勝浦飛長は被弾戦死しました。

第 4 次攻撃隊は 10 月 27 日 12 時に爆戦 2 機(木村幸男、松村 茂 1 飛曹)、直掩 2 機(新井康平上飛曹、関根利三郎飛長)が発進しましたが、攻撃が頓挫し、松村機が撃墜されました。

イ 初桜隊の攻撃[2)5)]

昭和 19 年 10 月 29 日 1015 に爆戦 3 機（**野並 哲**、**藤本 寿 1 飛曹**、**吉盛政利飛長**）、直掩 2 機（**石森 学中尉**、**前田秀秋上飛曹**）が発進し、マニラ東方で**高速空母『イントレピッド』**に対し、敵の艦載機が帰艦するのに紛れてレーダー識別されることなく突っ込みました。戦果は確認できませんでしたが、爆戦 3 名が戦死しました。米海軍資料では、同空母は火災を起こし、戦死者 10 名、負傷者 6 名を出しながら、火はすぐに消し止められたようです。

初桜隊の命名式（左端は大西長官）[2)]

ウ 葉桜隊の攻撃[5)]

昭和 19 年 10 月 30 日、1330 にセブ島を発進した爆戦 6 機（**崎田 清**、**広田幸宣**、**山下憲行**、**山沢貞勝 1 飛曹**、**鈴木鐘一**、**桜森文雄飛長**）、直掩 5 機（**畑井照久中尉**、**角田和男少尉**、**新井康平上飛曹**、**大川善雄 1 飛曹**、**藤岡三千彦飛長**）は、1430、スルアン島南西の機動部隊（空母 2、軽空母 2、戦艦 2、重巡 4、駆逐艦 15）を攻撃しました。

彼らは太陽を背にして高度 6 千 m から急降下し、先頭の 2 機は撃墜され、3 番機は**空母『フランクリン』**近くの海面に激突、4 番機が同空母の飛行甲板に激突し火災が起こって、飛行機 33 機が焼失したほか、56 名の戦死者と 60 名の負傷者（うち重症者 14 名）を出しました。5 番機は同空母近くの海面に激突しました。また、6 番機は**軽空母『ベロー・ウッド』**の飛行甲板後部に激突し火災が起こって、34 機中、12 機が炎上し、14 機が可動不能になりました。また、92 名が戦死し、約 100 名が負傷（うち重症 54 名）しました。2 隻の空母はサンフランシスコの海軍工廠に回航されました。

エ 第二神風攻撃隊の編成とその戦果[5)]

201 空（戦闘機）を中心に編成した**神風特別攻撃隊**に次いで、昭和 19 年 10 月 27 日と 29 日、艦爆の **701 空攻撃第 5 飛行隊山田恭司大尉**を隊長とする**第二神風特別攻撃隊**が編成されました。第二神風特別攻撃隊の下には、27 日に**忠勇**、**義烈**、**純忠**、**誠忠**及び**至誠隊**、29 日に**神武**、**神兵**及び**天兵隊**の各隊が設けられました。このため、『**神風特別攻撃隊**』は『**第一神風特別攻撃隊**』となりました。

各隊は体当たり攻撃機 3～4 機（彗星は 4 機、99 艦爆は 3 機）及び直掩・戦果確認機 2 機で編成するのを標準としていました。**第二神風特別攻撃隊**は、彗星 6 機、99 艦爆 5 機によって、戦艦 1 隻中破、巡洋艦 1 隻大破、輸送船 2 隻大破の戦果を挙げました。

オ 第三神風攻撃隊の編成とその戦果[1)5)]

201 空を中心に**第三神風特別攻撃隊・時宗隊**が編成されました。爆戦 3 機（**安田 昇少尉**、**船岡睦雄 2 飛曹**、**原武貞己飛長**）、直掩 2 機（**達川猪和夫中尉**、**海保博治上飛曹**）は、昭和 19 年 11 月 12 日 1115、クラーク基地群の一角にあるマルコット基地から飛び立ち、レイテ島タクロバン沖の大・中型輸送船約 40 隻を攻撃しましたが、敵艦突入の瞬間に戦闘機の迎撃を受け、**海保上飛曹**のみ帰還しました。参考文献 1 の米海軍記録には**上陸舟艇修理艦艇 2 隻**の損害がありますが、これは陸軍の**万朶隊**の戦果だと思われ、残念ながら**時宗隊**の戦果はなかったようです。

時宗隊の攻撃から 2 時間後、応急的に編成された**梅花隊**が飛び立ちましたが、爆戦 3 機（**尾辻是清中尉**、**和田八男三上飛曹**、**石本奥二飛長**）、直掩 1 機（**岡村恒三郎 2 飛曹**）が迎撃され、爆戦 1 機（**海保上飛曹**）、直掩 2 機（**本沢上飛曹**、**中山 2 飛曹**）が生還しましたが、戦果はなかったようです。

カ 第二十金剛隊の航空特攻[2)5)]

昭和 20 年 1 月 5 日に敵がリンガエン湾に来襲した際、我が偵察機が見たのは約千隻で、実際その後ろにはさらに 3～4 百隻の後続部隊がいました。これに対して零戦は四十数機しかなく、司令部は、出撃可能な零戦全機の特攻を命じました。また、201 空隊員には 6 日以降、全員陸戦隊になるよう命令が下りました。マバラカットの爆装零戦 40 機は 5 日、敵艦めがけて最後の特攻を行いました。

その夜、すべてを焼き払って山岳部にたてこもるはずが、焼却するに忍びない整備員たちは徹夜で故障した零戦を整備し、翌 6 日朝、5 機の可動機を差し出しました。玉井司令は、司令部に意見具申して、これの使用許可を得ました。

搭乗員は三十余名いましたが、中島飛行長が希望者を募ると、全員が手を挙げました。飛行長は涙をこらえて、「こちらで指名する」と述べ、玉井司令と相談して、マバラカットにおける最後の特攻隊を編成しました。隊名は**『神風特別攻撃隊第二十金剛隊』**で以下の編成でした。爆装は零戦、直掩は彗星です。

第 1 小隊:**中野勇三少尉、後藤喜一上飛曹、谷内善之上飛曹**、第 2 小隊:**中尾邦為中尉、千原昌彦上飛曹、**直掩:**床尾勝考中尉、多田恒夫上飛曹**。

敵機による激しい攻撃の中、マバラカット飛行場から次々と飛び立った操縦士は、感謝の言葉を叫び、あるいは笑顔で手を振り、上空を一度旋回してから、リンガエン湾を目指しました。

直掩機の報告によると、1 機は戦艦、1 機は巡洋艦、3 機は大型輸送船に命中し、爆裂しました。その際に撮った写真が右のものです。左の船が**戦艦『カリフォルニア』**で、爆発を起こしています[5)]。

フィリピン・ルソン島のアメリカ軍上陸地点リンガエン湾の米艦船群に特攻機が殺到。1945年1月6日。

体当たりされて煙に包まれた「カリフォルニア」。上空の黒い斑点は対空砲火の炸裂。

1 月 6 日、特攻攻撃による甚大な損害を被った米戦艦[2)]

キ 死ぬことが目的化[2)5)]

第一神風特別攻撃隊・朝日隊に**磯川質男 1 飛曹**(甲飛 10 期)がいました。磯川 1 飛曹は昭和 19 年 10 月 21 日の出撃で、本隊が敵を発見できずに帰還しましたが、悪天候で味方とはぐれ、敵機と遭遇して戦闘する等、燃料がなくなって不時着し、1 ヵ月かけて歩いて**マバラカット**に帰還しました。しかし、すでに彼は戦死扱いにされていました。

そして、11 月下旬、201 空の**甲飛 10 期生**が輸送機で内地に引き揚げることになり、磯川 1 飛曹も同期生とともに輸送機に向かっていましたが、**背後から要務士の「磯川待て！」という声が飛び、「貴様は特攻で死んでもらわなければならない」**と言われ、彼は飛行場の片隅で寂しそうに手を振って仲間を見送りました。甲飛 10 期生たちは、それを自分たち全員に対する処遇であると受け取りました[5)]。

磯川 1 飛曹は、戦死の取り消し後内地に帰り、長崎県大村の 343 空(司令:源田 実大佐)に配置となり、昭和 20 年 5 月 28 日の夜、敵戦闘機と交戦して殉職しました。

昭和 19 年 10 月～12 月の間、直掩機として特攻に参加した**角田和男元中尉**は、参考文献 2 の筆者・森本氏に、「レイテ島タクロバンの桟橋に特攻をかけるように命ぜられた隊長が、いくらなんでも桟

橋にぶつかるのは嫌だ。空振りでもいいから（タクロバンには）船がいるんだから、目標を輸送船に変えてくれと頼んだが、**中島飛行長**は、**文句を言うんじゃない、特攻の目的は戦果にあるんじゃない、死ぬことにあるんだ**と怒鳴りつけていました。（中略）あのときは 20 機近く出たんですが、あまり成功しなかった。目標が桟橋ではいくらなんでもひどいなあと思って私も聞いていました」と語っています[2)]。**中島少佐**の言動に見られるように、「**死ぬこと自体が目的**」という、妙にゆがんだ思想が生まれていました。

(2) 陸軍特別攻撃隊のその後の攻撃[1)2)4)6)7)9)]

ア 特攻隊の増設・派遣

前号では**万朶隊**及び**富嶽隊**の初期の行動について触れましたが、昭和 19 年 11 月 2 日、大本営から**神風特攻隊**の大戦果が発表されて刺激を受けた**陸軍中央部**は新たに **6 コ隊**の編成を示達し、**第 1～第 6 八紘隊**と命名しました。各隊は **12 名（12 機）**（**下志津教導飛行師団**だけは志願者を絞り切れずに 18 名 18 機）で、**6 コ隊**の合計は **78 名（78 機）**となりました。そして 11 月 16 日、陸軍はさらに **6 コ隊**の編成を示達しました[7)]。

これより先、万朶隊・富嶽隊と同時に**下志津教導飛行師団**で**第 1 司偵隊**が編成され、特攻のための捜索、誘導及び戦果確認に任じました。隊長は**伊藤哲郎大尉**（53 期）で、装備は**百式司偵 6 機**でした。

特攻要員は、命令ではなく、志願者によって編成され、隊長のほとんどが、技量優秀な実施学校教官の 56 期生で、隊員は卒業したばかりの学生でした。

第 51 教育飛行師団は、内地と朝鮮で下士官の戦技教育を担任する部隊で、**第 10 飛行師団**は、関東地区の防空を担任する部隊です。

八紘隊の各隊名は、第 4 航空軍司令官・富永中将の命名です。144 名中、比島戦における戦死者は 115 名で、うち 57 期 28 名、特操 1 期 32 名、少飛伍長 19 名でした。

八紘隊の編成・派遣状況[6)7)]

隊名	機種 機数	編成完結 （転属）	編成担任	隊長 隊員構成
第 1 隊 （八紘）	1 式戦 12	11.6 （11.19）	明野教導 飛行師団	田中　秀志中尉（56 期） 57 期、特操 1 期
第 2 隊 （一宇）	1 式戦 12	11.6 （11.20）	常陸教導 飛行師団	栗原　恭一中尉（56 期） 57 期、特操 1 期
第 3 隊 （靖国）	1 式戦 12	11.8 （11.19）	第 51 教育 飛行師団	出丸　一男中尉（56 期） 特幹、少飛
第 4 隊 （護国）	1 式戦 12	11.6 （12.2）	第 10 飛行 師団	遠藤　　榮中尉（56 期） 57 期、特操 1 期、少飛
第 5 隊 （鉄心）	99 式襲 12	11.6 （11.16）	鉾田教導 飛行師団	松井　　浩中尉（56 期） 各出身混成
第 6 隊 （石腸）	99 式襲 18	11.6 （11.16）	下志津教導 飛行師団	高石　邦雄大尉（54 期） 57 期
第 7 隊 （丹心）	1 式戦 12	11.20 （12.6）	明野教導 飛行師団	石田　國雄中尉（56 期） 57 期、特操 1 期
第 8 隊 （勤皇）	2 複戦 12	11.20 （12.3）	鉾田教導 飛行師団	山本　卓美中尉（56 期） 各出身混成
第 9 隊 （一誠）	1 式戦 12	11.25 （12.20）	明野教導 飛行師団	津留　　洋中尉（56 期） 57 期、特操 1 期
第 10 隊 （殉義）	1 式戦 12	11.20 （12.18）	常陸教導 飛行師団	敦賀　眞二中尉（56 期） 各出身混成
第 11 隊 （皇魂）	2 複戦 12	11.20 （？）	鉾田教導 飛行師団	三浦　恭一中尉（56 期） 各出身混成
第 12 隊 （進襲）	99 式襲 12	11.30 （12.23）	下志津教導 飛行師団	福島　弘人大尉（53 期） 各出身混成

イ 万朶隊（99 双軽）の悲劇

富永司令官は特攻出撃前には送別の宴を開催するのを常としており、昭和 19 年 11 月 5 日にマニラに召集され、百キロも離れていないリパを 99 双軽で飛び立った**万朶隊将校全員（隊長・岩本益臣大尉**（53 期）、**小隊長・園田芳巳、安藤浩、川島孝中尉、航法・中川克己少尉）**はニコラス飛行場南西付近で、久しぶりに来襲した米機動部隊の艦載機グラマンの攻撃を受けて戦死してしまいました。

11 月 12 日、**万朶隊の 4 機**は、司偵 1 機、戦闘 11 機の偵察・誘導・掩護のもと、岩本隊長らの遺骨

を抱いて、レイテ湾口付近の艦船を攻撃し、**戦艦、輸送船各 1 隻撃沈**を報じました。掩護の戦闘機 1 機も体当たりを敢行しました。参考文献 1 の米海軍記録には沈没の記録はなく、**上陸舟艇修理艦艇 2 隻**の損害がありますので、これが実際の戦果と考えられます。**万朶隊**として**田中逸夫、生田留夫曹長、久保昌昭軍曹**が散花し[7]、全員**少尉に特進**しました。

その他、11 月 15 日に**石渡俊行軍曹**、12 月 20 日に**鵜沢邦夫軍曹**がレイテ湾に出撃し、戦果を見ずに散花しています[2)7)]。

リパ飛行場における万朶隊（左端が岩本隊長）[9]

富嶽隊長西尾少佐の寺田参謀長への出撃申告[9]

ウ　富嶽隊（4 式重）の攻撃

昭和 19 年 11 月 5 日の米艦載機による攻撃で富嶽隊も 3 機が小破しました。11 月 7 日、**隊長・西尾常三郎少佐**（50 期）**以下 4 機**がラモン湾に出撃し、敵を発見できずに引き返しましたが、山本機は再度攻撃に向かい、**山本達夫中尉**（56 期）と**浦田六郎軍曹**が散花しました[7]。

11 月 13 日、マルコット飛行場を発進し、マニラ北東の敵機動部隊攻撃に向かった**富嶽隊 5 機**が敵のグラマン戦闘機二十数機の攻撃に遭い、**西尾隊長機**は自爆、**1 機**が**戦艦**に体当たりし、他の 3 機は反転帰還しました。参考文献 1 の米海軍記録には**軽巡、駆逐艦各 1 隻**の損害がありますので、このうちの 1 隻がそうだったのかもしれません。この日の攻撃で、**西尾少佐、柴田禎男少尉**（57 期）、**米津芳太郎少尉**（少候 24 期）、**国重武夫准尉、島村信夫曹長、荘司楠一軍曹**が散花しました[7]。

その後、11 月 15 日、12 月 16 日、昭和 20 年 1 月 10 日及び 1 月 12 日に攻撃を行い、8 名が散花しています[7]。

エ　薫（かおる）空挺隊の攻撃

昭和 19 年 11 月 26 日夜、**レイテ島ブラウエン飛行場撹乱**のために、**薫空挺隊**による**『義号作戦』**が決行されました。部隊規模は文献により、約 30 名、約 40 名、約 50～60 名、約 60 名、約 80 名などさまざまですが、**飛行第 208 聯隊**の**零式輸送機**（DC-3 のライセンス生産で海軍から譲渡受け）**4 機**が使用されており、標準で 1 機に 21 名乗れますから、少なくとも約 60 名はいたでしょう。長は**中　重男中尉**（55 期）でした。

出撃中の薫空挺隊員[2]

この中には、勇猛で知られる台湾の**高砂族兵士**が **24 名**含まれていたといいます[4)]。インターネットでは、兵士のほとんどが**高砂族**であったという記事もあります。**「飛行場に胴体着陸して斬り込みを行い、その後は山中に隠れ、現地の第 16 師団に合流せよ」**という命令を受けましたが、暗闇の中の飛行であったため、リパを発した 4 機のうち 1 機は行方不明、1 機はブラウエン北飛行場上空で対空砲火により撃墜され、2 機は**ドラッグ飛行場**近くの海岸や河口付近に不時着したようです[4)]。士気の高揚以外、特筆すべき戦果はありませんでした。

オ 八紘隊の攻撃

昭和 19 年 11 月 26 日、**靖国隊**の爆装 1 式戦 1 機が出撃しましたが戦果はありませんでした。翌 11 月 27 日、**八紘隊**の**爆装 1 式戦 10 機**がレイテ湾に出撃しました。この日は、**戦艦『コロラド』**に 1 機命中・1 機至近弾、**軽巡『セント・ルイス』**に 2 機命中、**同『モンペリーア』**に 1 機至近弾、**駆潜艇『SC-744 号』**に 1 機命中沈没の戦果があり、これは**八紘隊**によるものと見られます[2)]。散花したのは、**隊長・田中秀志中尉**（56 期）、**藤井信少尉**（57 期）、**森本秀郎少尉**（57 期）、**白石国光少尉**（特操 1 期）、**道場七郎少尉**（特操 1 期）、**馬場駿吉少尉**（特操 1 期）、**善家善四郎少尉**（幹 9）、**武内健一少尉**（幹 9）、**寺田行二少尉**（幹 9）、**細谷幸吉少尉**（幹 9）です[7)]。

11 月 29 日、**靖国隊**の**爆装 1 式戦 6 機**がレイテ湾に突入し、**戦艦『メリーランド』**、**駆逐艦『ソウフリー』**、**同『オーリック』**が損傷を受けています[2)]。参考文献 7 には 12 月 5 日とありますが、誤りと思われます。

散花したのは、**大坪 明少尉**（幹 7 期）、**秦 音次郎少尉**（幹 8 期）、**河島鉄藏伍長**（少飛 13 期）、**寺島忠正伍長**（少飛 13 期）、**松井秀雄伍長**（少飛 13 期）、**五十嵐四郎伍長**（少飛 13 期）です[7)]。

カ 高千穂空挺隊の降下

パレンバン、**薫空挺隊**に次いで、3 回目の空挺作戦（**和号作戦**）が行われました。以下、参考文献 4 とインターネット記事を併用しながら記述します。空挺攻撃兵力の細部はよく分かりませんが、**百式輸送機 1 機の標準乗客数が 11 名**ですので、それで類推したいと思います。

昭和 19 年 11 月 5 日、**挺進第 3 聯隊**、**挺進第 4 聯隊**、**挺進飛行第 1 戦隊**（百式輸送機）、**挺進飛行第 2 戦隊第 1 中隊**（百式輸送機）から成る**第 2 挺進団**（**高千穂空挺隊**）が編成され、**ブラウエン飛行場占領**を企図しました。団長は操縦士の**徳永賢治大佐**（33 期）です。

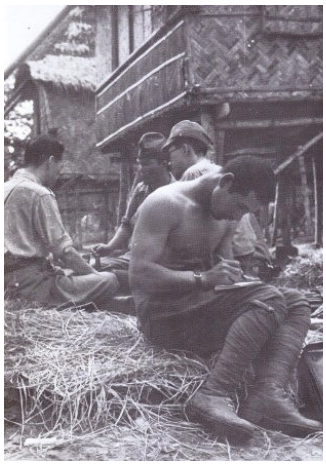
薫空挺隊は小勢力で期待した戦果が得られなかったため、今度は大勢力で、本隊は**レイテ島ブラウエン**にある**ブラウエン北飛行場**、**ブラウエン南飛行場**及び**サンパプロ飛行場**（ブラウエン中飛行場）、分遣隊は**同島**の**ドラッグ飛行場**及び**タクロバン飛行場**に指向することになりました。

12 月 6 日午後、ルソン島アンヘレス飛行場から**百式輸 35 機**、**百式重 13 機**（第 5 飛行団、煙幕弾投下任務）、**百式重 4 機**（第 5 飛行団、タクロバン及びドラッグに胴体着陸攻撃任務）が離陸しました。上空は **4 式戦『疾風』30 機**が掩護しました。**第 1 次攻撃兵力**は 474 名でした[4)]。

落下傘降下は、日没 20 分後の 1840 に開始されましたが、敵の対空砲火は厳しく、全輸送機が被弾し、十数機が未帰還となりました[4)]。

ブラウエン北飛行場には百式輸 17 機で**挺進第 3 聯隊**の聯隊長を含む部隊が落下傘降下しましたが、夜暗のため、実際に飛行場に降下できたのは約 60 名でした。しかし、飛行場にいたのは、陸軍の軽連絡機だけで、空挺隊員はこれらと、燃料集積所を破壊しました[4)]。

ブラウエン南飛行場には輸送機 6 機で**挺進第 3 聯隊**、**サンパプロ飛行場**には輸送機 3 機で**挺進第 4 聯隊**が落下傘降下しましたが、ここも陸軍の連絡機や小型輸送機だけで、**ブラウエン地区**を合わせて約 20 機を破壊したに留まりました[4)]。



遺書を書く高千穂空挺隊員[9)]

ドラッグ飛行場には**挺進第 3 聯隊**が重爆 2 機で胴体着陸、**挺進第 4 聯隊**が輸送機 7 機で落下傘降下しましたが、いずれかが 2 機撃墜されました[4)]。少なくとも胴体着陸 1 機の 11 名は戦闘行動ができたようです。

タクロバン飛行場には**挺進第 4 聯隊**が重爆 2 機で胴体着陸、**挺進第 3 聯隊**が輸送機 2 機で落下傘降下を試みましたが、重爆 1 機が撃墜されました。また、胴体着陸した重爆に火災が発生し、斬り込み隊員 8 名と搭乗員 3 名が死亡しました。しかし、この火が米軍機に燃え移り、6 機が消失、5 機が破損という結果となりました[4)]。

第2次降下部隊は、輸送機20機でレイテ島直前まで行きましたが、天候の悪化で中止となり、米第7師団がオルモックに上陸したために、12月8日、ブラウエン飛行場占領作戦は中止となりました。

ただし、オルモックに上陸した敵と対峙する我が第35軍を少しでも支援するため、残存の輸送機7機で12月8日～16日の間、6回にわたり、挺進第4聯隊長以下524名をオルモック北北西のバレンシアに落下傘降下させました。これが陸軍4回目の空挺作戦となりました。降下した部隊は、現地の第26師団を支援したのち地上軍と合流して、第35軍の指揮下に入りました[4]。

キ　菊水隊（百式重）の悲劇

12月14日、百式重9機がネグロス島近海に出撃し、全機が敵戦闘機の餌食になりました。百式重『呑龍』は『鈍重』と呼ばれ、運動性能の悪い機体でしたが、富永第4航空軍司令官が昼間に特攻させるというので山本第5飛行団長は、夜間の反復通常攻撃をさせてほしいと意見具申しましたが、航空作戦についてまったく素人の富永中将[2]はこれを聞き入れず、0630離陸を命令しました。団長は攻撃隊長に、攻撃方法を克明に指示し、「弾を落して還って来い」と指示しましたが、隊員の士気は高く、全員が死を決意して下着を着替え、遺品を整理し、多くの隊員が乗り組みました。この特攻で、飛行第74戦隊2機・宮崎　隆中尉（56期）以下14名中13名、飛行第95戦隊7機・丸山義正大尉（53期）以下35名中34名が散花し、奇跡的に2名が生還しました[7]。翌年1月17日、富永中将は一人台湾に逃れ、後退命令が参謀長の誤解であったことが分かったのちも、比島に帰ろうとはしませんでした。

(3) 陸海軍航空特別攻撃隊の比島における作戦結果[1)2)7)]

比島における海軍の最終特攻は昭和20年1月9日（リンガエン湾の揚陸初日）であり、第24・第25金剛隊が戦艦『ミシシッピー』に1機体当たりし、戦死36人、負傷63人の戦果を挙げたほか、軽巡『コロンビア』と護衛駆逐艦『ホッジス』に各1機が体当たりを成功させました。ただし、その後の例外として、1月25日に住野秀信中尉の零戦がリンガエン湾の米艦船群に突入しています[1]。

昭和20年1月12日、富嶽隊（4式重）の進藤浩康大尉（54期）、根木基夫大尉（55期）、宇田富福伍長（少飛12期）、旭光隊（99双軽）の長　幹男少尉（57期）、大山豊司軍曹、石毛秀夫伍長、小池聖伍長、笹田亮一伍長、精華隊（戦闘）の林　正信少尉（57期）、浅井四郎少尉（特操1期）、大木　健少尉（同）、太田義晴少尉（同）、鹿児島澄行少尉（同）、加藤昌一少尉（同）、小池義太郎少尉（同）、三浦廣四郎少尉（同）、鎌田　孝少尉（幹）、酒井久雄少尉（同）、志田新太郎少尉（同）、中尾孫二郎少尉（同）、上田與志則曹長（91期）、小川定雄軍曹（93期）、片江　好軍曹（同）、植木秀五郎軍曹（少飛10期）、渡辺与史夫軍曹（同）、小林拾春伍長（93期）、三堀一作伍長（少飛11期）、田中二郎伍長（少飛12期）、遠藤正七伍長（少飛13期）、皇華隊（2式双襲）の中尾義一曹長、斉藤碩二軍曹、小泉隊（戦闘）の久住国男准尉の32名という総攻撃の様相を呈した特攻がありました[7]。この攻撃で、護衛駆逐艦『リチャード・W・シューセンズ』『ギリガン』、上陸作戦兵員輸送船『ゼイリン』、戦車揚陸艦『LST-700』に体当たり又は至近弾を与えて損傷させました[1]。

比島における陸軍の最終特攻は昭和20年1月13日で、精華隊（戦闘）の吉田　修少尉（特操1期）、梶田七之助伍長（少飛11期）がリンガエン湾の米艦船群に突入し、護衛空母『サラモア』と兵員揚陸艦『ザイリン』に損傷を与えました[1)2)]。

12頁に森山康平著『特攻』[1]から引用した『比島特攻による米・豪艦船の損害』を記しましたが、1月21日にも航空特攻によると見られる損害が出ています。この攻撃部隊は不明です。また、正規編成の特攻隊による比島特攻作戦の戦没者数は参考文献7の巻末付録で252名となっています。一部誤記もありますが、比島の正規航空特攻で散華した陸軍の英霊は約250名であると言えると思います。

森山康平氏は『**特攻**』[1)]で、各文献を引用して**比島特攻の結果**を記されていますが、研究者によって算定の仕方に差があります。

①奥宮正武『海軍特攻』

突入機 202 機、**搭乗員** 256 名。[突入機]零戦：158 機、99 艦爆：17 機、彗星：12 機、艦爆（機種不明）：4 機、銀河：9 機、月光：1 機、天山：1 機。[その他未帰還機] 131 機。

②森本忠夫『特攻』[2)]

海軍特攻：特攻機 463 機、戦死 417 名以上。**陸軍特攻**：特攻機 202 機、戦死 251 名。

合計：特攻機 665 機、戦死 668 名以上。

③安延多計夫『ああ神風特攻隊』

海軍特攻：出撃特攻機 447 機、出撃直掩機（戦果確認機）249 機、実際の体当たり特攻機 300 機。

陸軍特攻：出撃特攻機 300 機。

④米国側記録：艦船突入機 121 機、至近弾機 53 機。

⑤特攻隊慰霊顕彰会『特別特攻隊』

海軍特攻：特攻機 333 機、戦死 420 名。**陸軍特攻**：特攻機 202 機、戦死 251 名。

⑥生田 惇『陸軍航空特別特攻隊史』[7)]

海軍特攻：未帰還 331 機、戦死 420 名。**陸軍特攻**：未帰還 204 機（251 名）。

昭和 20 年 2 月、**第 4 航空軍**は、捷号作戦の総合戦果を発表しました（右表）。損害機数は体当たり 148 機、未帰還 170 機、自爆 24 機。合計 342 機としています[7)]。

342 機の損害で 307 隻以上に損害を与えたというのは過大に過ぎますし、米海軍資料（作戦年誌）[1)]には我が海軍によるものが含まれていますので、陸軍の戦果は米海軍の数字の 3 分の 1 以下と見る必要があります[7)]。

しかし、陸軍は、上陸して戦力を発揮する兵員や装備を搭載した輸送船の攻撃を重視しており、戦果も多数報告していますので、輸送船についてはかなり戦果があったと思います。米海軍作戦年誌には輸送船の損害は厳密には記載しないようです。

陸軍の戦果見積と米海軍資料（括弧内）[7)]

艦　種	撃　沈	撃　破	計
空　母	8 (2)	7 (18)	15 (20)
戦　艦	6	5 (5)	11 (5)
巡洋艦	6	14 (8)	20 (8)
駆逐艦	6 (3)	24 (22)	31 (25)
大型艦	3		3
輸送船	54	119	173
上陸用舟艇	32 (14)	22	54 (14)
計	116以上 (19)	191以上 (53)	307以上 (72)

次頁にあるように、**陸海軍の特攻によって、少なくとも延べ 142 隻に損害を与えた**ことは、**艦艇による特攻を含めて、特攻隊員の功績は絶大**であったと思いますが、自ら命を捧げなければならなかった隊員たちの気持ちを推し量りますと、悲しみはいっそう募ります。

比島作戦に参加した作戦飛行中隊数は、**戦闘 70 コ中隊**（1 式戦 25 コ中隊、2 式戦 6 コ中隊、3 式戦 12 コ中隊、4 式戦 27 コ中隊）、**99 襲 12 コ中隊**、**2 式襲**（複戦改）**6 コ中隊**、**99 双軽 6 コ中隊**、**百式重爆 6 コ中隊**、**偵察 14 コ中隊**、**空挺 6 コ中隊**の**合計 120 コ中隊**で、**特攻隊の兵力**は、**重爆 1 コ中隊**、**軽爆 1 コ中隊**、**1 式戦 7 コ中隊**、**99 襲 3 コ中隊**、**2 式襲 2 コ中隊**の**合計 14 コ中隊**でした。そして、戦局の緊迫とともにこれらの部隊が随時特攻に参加しました[7)]。

また、**第 4 航空軍**は比島の戦いで、部隊装備の約 1,400 機と補給受けした約 1,400 機の合計約 2,800 機を失い、操縦者約 1,800 人を失いました[7)]。この後も攻撃のほとんどは特攻で、昭和 20 年 1 月 18 日の戦争指導会議において、**「陸海軍全機特攻化」**の方針が決定されました。

比島特攻による米・豪艦船の損害[1)]

No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇	No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇	No.	年	月/日	沈没・損傷艦艇
1	19	10/21	(豪)重巡オーストラリア	49	19	5	駆逐艦マグフォード	97	20	5	濠駆逐艦アランタ
2		24	**艦隊曳船ソノマ**	50			**中型揚陸艦 20 号**	98		6	**掃海駆逐艦ロング**
3			**歩兵揚陸船 1065 号**	51			中型揚陸艦 23 号	99			戦艦ﾆｭｰ･ﾒｷｼｺ(2)
4			貨物船ﾄﾏｽ･ｵｰｸﾞｽﾀ	52		7	**駆逐艦マハン**	100			戦艦カリフォルニア
5		25	**護衛空母セント・ロー**	53			駆逐艦ラムスン	101			重巡ルイスヴィル(2)
6			護衛空母サンガモン	54			上陸用高速輸送艦ﾘｯﾄﾞﾙ	102			重巡ミネアポリス
7			護衛空母スワニー	55			戦車揚陸船 LST-737	103			重巡コロンビア
8			護衛空母サンティ	56			**中型揚陸艦 318 号**	104			駆逐艦ニューコム
9			護衛空母ﾎﾜｲﾄ･ﾌﾟﾚｰﾝｽﾞ	57			**輸送駆逐艦ワード**	105			駆逐艦ﾘﾁｬｰﾄﾞ･P･ﾘｰﾘｲ
10			護衛空母カリニン・ベイ	58		10	**魚雷艇 PT-323(放棄)**	106			駆逐艦オブライエン
11			護衛空母キトカン・ベイ	59			駆逐艦ﾋｭｰｽﾞ	107			掃海艇サウザード
12		26	護衛空母スワニー	60			**貨物船ｳｨﾘｱﾑ･S･ﾗｯﾄﾞ**	108			上陸用高速輸送艦ﾌﾞﾙｯｸｽ
13		27	商船ｱﾚｸｻﾝﾀﾞｰ・ﾒｲｼﾞｬｰｽﾞ	61			**戦車揚陸艦 1075 号**	109			濠巡洋艦オーストラリア(2)
14			商船ﾍﾟﾝｼﾞｰ・ｲｰﾄﾞ・ﾎｲｰﾗｰ	62		11	**駆逐艦レイド**	110		7	上陸作戦兵員輸送艦ｷｬﾗｳｪｲ
15		28	軽巡デンヴァー	63		12	駆逐艦コルドウェル	111			戦車揚陸船 LST-912
16		29	空母イントレピッド	64		13	軽巡ナッシュビル	112			**掃海駆逐艦パーマー**
17		30	空母フランクリン	65			駆逐艦ハラデン	113			**掃海駆逐艦ハビ**
18			軽空母ベロー・ウッド	66		15	**戦車揚陸船 LST-472**	114		8	護衛空母キトカン・ベイ(2)
19		11/1	**駆逐艦ｱﾌﾞﾅｰ･ﾘｰﾄﾞ**	67			**戦車揚陸船 LST-738**	115			護衛空母ｶﾀﾞｼｬﾝ・ﾍﾞｲ
20			駆逐艦アンダースン	68			護衛空母ﾏｰｶｽ･ｱｲﾗﾝﾄﾞ	116			濠巡洋艦オーストラリア(3)
21			駆逐艦クラックストン	69			駆逐艦ﾎﾟｰﾙ・ﾊﾐﾙﾄﾝ	117			濠歩兵揚陸艦ｳｪｽﾄﾗﾘｱ
22			駆逐艦アンメン	70			駆逐艦ホーワース	118		9	戦艦ミシシッピー
23		2	商船ﾏｯｼｭｰ･P･ﾃﾞｯﾃﾞｨ	71			魚雷艇 PT-223	119			軽巡コロンビア
24		3	空母レキシントン	72			駆逐艦ラルフ・タルボット	120			護衛駆逐艦ホッジス(艇)
25		12	上陸舟艇修理艦ｴｼﾞﾔﾘｱ	73		17	魚雷艇 PT-84	121			兵員輸送艦ｳｫｱﾎｰｸ(艇)
26			上陸舟艇修理艦ｱｷﾘｰｽﾞ	74		18	**魚雷艇 PT-300**	122			濠巡洋艦オーストラリア(4)
27			商船ｼﾞｪﾚﾐｱ･M･ﾃﾞｨﾘ	75		21	**戦車揚陸船 LST-460**	123		10	護衛駆逐艦ﾘﾚｲ・ｳｨﾙｽﾝ
28			商船レオニダズ・メリット	76			**戦車揚陸船 LST-749**	124			上陸作戦兵員輸送艦ﾃﾞｭﾍﾟｰｼﾞ
29			商船ﾓﾘｿﾝ・R・ｳｪｲﾄ	77			駆逐艦フート	125			戦車揚陸船 LST-610(艇)
30			商船トマス・ネルソン	78		22	駆逐艦ブライアント	126		11	上陸用高速輸送艦ﾍﾞﾙﾅｯﾌﾟ
31		17	上陸作戦兵員輸送艦ｱﾙﾋﾟﾝ	79			**貨物船ジョン・バーク**	127		12	護衛駆逐艦ﾘﾁｬｰﾄﾞ･W･ｼｭｰｾﾝｽﾞ
32			商船ギルバート・スチュアート	80			貨物船ｳｨﾘｱﾑ・ｼｬﾛﾝ	128			護衛駆逐艦ギリガン
33		18	商船アルコア・パイオニア	81		30	**雑役特務艦ﾎﾟｰｷｭﾊﾟｲﾝ**	129			上陸作戦兵員輸送艦ｾﾞｲﾘﾝ
34			商船ケイプ・ロマノ	82			駆逐艦ブリングル	130			戦車揚陸船 LST-700
35			商船シルベス・アルミランテ	83			駆逐艦ｷﾞｬﾝｽｳﾞｰｱﾄ	131			貨物船オーチス・スキナ
36		23	上陸作戦兵員輸送艦ｼﾞｪｰﾑｽ・オーハラ	84			魚雷艇母艦オレステス	132			貨物船カイル・V・ｼﾞｮﾝｿﾝ
37		25	空母エセックス	85	20	1/1	給油艦コワネスク	133			貨物船ｴﾄﾞﾜｰﾄﾞ・N・ｳｪｽﾄｺｯﾄ
38			空母イントレピッド	86		2	給油艦コワネスク(2)	134			貨物船ﾃﾞｨﾋﾞｯﾄﾞ・ﾃﾞｭﾄﾞﾘ・ﾌｨｰﾙﾄﾞ
39			空母ハンコック	87		4	**護衛空母オーマニベイ**	135			輸送船ウォー・ホーク
40			軽空母キャボット	88			**貨物船ﾘｭｰｲｽ・L・ﾀﾞｲﾁ**	136			戦車揚陸艦 778 号
41		27	**駆潜艇 SC-744**	89		5	護衛空母マニラ・ベイ	137		13	護衛空母サラモア
42			空母コロラド	90			護衛空母ｻｳﾞｫ・ｱｲﾗﾝﾄﾞ	138			兵員揚陸艦ザイリン
43			軽巡セント・ルイス	91			重巡ルイスヴィル	139		21	空母タイコンデロガ
44			軽巡モンペリーア	92			駆逐艦ヘルム	140			軽空母ラングレイ
45		29	戦艦メリーランド	93			護衛駆逐艦スタフォード	141			駆逐艦マドックス
46			駆逐艦ソーフレー	94			水上機母艦(小型)オルカ	142		31	駆潜艇 PC-1129(艇)
47			駆逐艦オーリック	95			艦隊曳船アパチェ				
48		12/5	駆逐艦ドレイトン	96			濠巡洋艦オーストラリア				

注　1)『第2次大戦米国海軍作戦年史』(黒字)、2)『ドキュメント神風』(ﾃﾞﾆｽ･ｳｫｰﾅｰ、ﾍﾟｷﾞｰ･ｳｫｰﾅｰ、妹尾作太郎著)(青字)、3)赤塗り潰しにゴシック太字は沈没、4)(艇)は特攻艦艇によるもの、5)(2)は2回目の攻撃を表す

おわり

次回は「**航空特攻（4）**」

＜ 参 考 文 献 ＞

1)「特攻」（平成 19 年 5 月　森山　康平著　㈱河出書房新社）
2)「特攻　外道の統率と人間の条件」（平成 17 年 7 月　森本　忠夫著　㈱光人社）
3)「重爆特攻「さくら」弾機　日本陸軍の幻の航空作戦」（平成 22 年 7 月　林えいだい著　㈱光人社）
4)「陸軍航空隊全史」（昭和 62 年 9 月　木俣　滋郎著　㈱朝日ソノラマ）
5)「神風特攻の記録」（平成 17 年 8 月　金子　敏夫著　㈱光人社）
6)「戦史叢書　陸軍航空の軍備と運用(3)」（昭和 51 年 5 月　防衛庁防衛研修所戦史室）
7)「陸軍航空特別攻撃隊史」（昭和 52 年 12 月　生田　惇著　㈱ビジネス社）
8)「知覧特別攻撃隊」（平成 16 年 9 月　改訂 2 刷　村永　薫　㈲ジャプラン）
9)「陸軍航空の鎮魂」（昭和 54 年　3 月 2 版　航空碑奉賛会）